

Project brief 1

プロジェクト紹介【寄稿】

「五箇山らしい」山村の原風景づくり

南 雅

MINAMI Masao
株式会社東洋設計
都市デザイン部
技術部長



写真1 相倉の合掌集落

え、地域の宝を積極的に評価し、より多くの人々が様々な形で地域づくりに取り組むことが重要です。

そこで、これまでに地域内で合意形成される機会のなかった「五箇山らしさ」について、「原風景づくり」＝「地域づくり」の視点から整理しつつ、原風景を守り育てるための具体的な取り組みを「提案」としてガイドラインにとりまとめました。ここでは、ガイドラインの概要と策定後の状況、今後の課題を紹介します。

ガイドラインの位置づけ

ガイドラインは、五箇山らしい原風景を守り育てるための地域づくりの指針です。

一般的に原風景 (Primal Scene) とは「人々の原体験から生ずる

様々なイメージを表す風景」と解釈されますが、ここでは地域の自然や歴史・文化、人々の暮らしに根ざした「有形・無形の景」と捉えています。

単に視対象である景観を修景するための規範集となるガイドラインではなく、原風景を生み出す源となる人々の営みを絶やさないために大切にすべきことをとりまとめることを重視しました。五箇山らしい原風景の本質を問題提起することで、原風景を守り育てるための取り組みを、どのように続けるかを考える拠り所にしようとしたのです。

五箇山の優位性の検討

五箇山らしい原風景の選定にあたっては、住民有志(大人18名と中学生13名)と県内で働く欧米人7名がモニターとなり、ワークシ

ップで季節毎に「自然と共生する暮らしの場面」を選定しました。

五箇山らしい原風景は、豊かに暮らす人々とともに在り、それらを守り育てるために、五箇山の内部資源(強み・弱み)と五箇山を取り巻く外部環境(機会・脅威)から、五箇山の優位性を概観しました(図2)。

五箇山の強みは、世界遺産の合掌集落を有することだけでなく、長年にわたり都市住民との交流活動が続けていることにあります。

事業開始後30年を超える東京都武蔵野市のセカンドスクール受け入れ、全国から五箇山の総人口のほぼ1/3に当たる延べ約1,000人の農作業オーナーが集う「みんなで農作業の日in五箇山」、集落の民家や空き地を活用した「上畠アート」など、これらの交流機会は貴

重な財産となっています。

一方、五箇山の弱みは、少子高齢化の進行、限界集落の増加によるコミュニティ崩壊が懸念されることです。特に空き家の増加は、景観上も好ましくなく、こうした状況の改善が求められています。

また、ガイドライン策定当時、100年に一度といわれたリーマンショックによる世界的な景気後退傾向や、円高局面における訪日外国人の減少など、社会・経済情勢の悪化が、生き残りをかけた地域づくり競争の激化と相まって、地域振興の脅威となりました。このような中、平成20年の東海北陸自動車道の全線開通による交流圏拡大や、政府による訪日外国人1,000万人達成に向けた「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の施策推進を好機と捉えました。

特に、訪日外国人の受け入れにおいては、仏ミシュラン社発行の『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で、白川郷とともに五箇山が「わざわざ旅行する価値がある見逃せない観光地」として三つ星評価を受け、上質な地域情報が第三者的機関から発信されたことも今後の地域づくりにおける重要な要因として注目されました。

五箇山らしい原風景

ガイドラインに掲載する五箇山らしい原風景について、その評価の視点は、五箇山の人々に安らぎや充足感をもたらす季節感のあるもので、同時に都市住民にとって

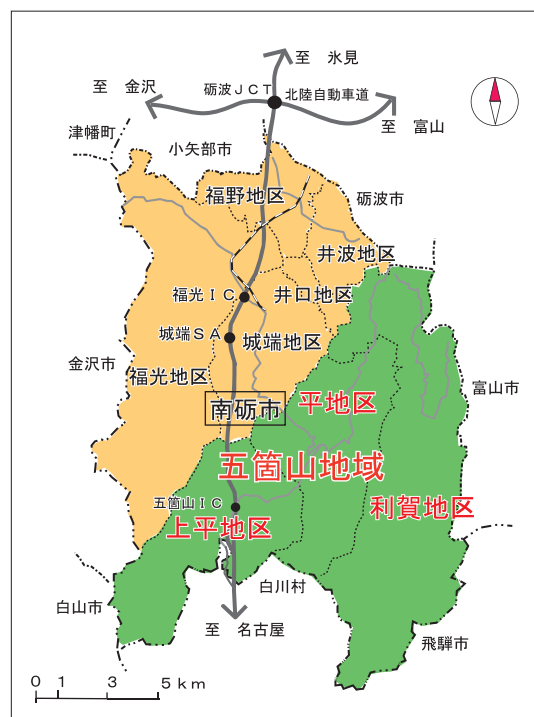


図1 南砺市五箇山地域の概況



図2 五箇山らしい原風景づくりを進める際の優位性



写真2 ワークショップの様子

もその美しさが、かけがえのない「原風景」的な懐かしさや魅力として認識されるものとなりました。

そこで、各々のモニターが収集した風景を五箇山らしい原風景として評価する4つの視点を「多様で

豊かな自然環境の保全」「地域コミュニティの継承」「都市住民とのパートナーシップの構築」としました(図3)。そして、季節毎に生きた風景を選定し、これらを守り育てる具体的な取り組みを提案しました(表1)。

原風景を守り育てるために
五箇山らしい原風景を守り育てるための主役は、地域で生き生きと暮らす人々です。大人から子ども、男女を問わず誰もが「できる

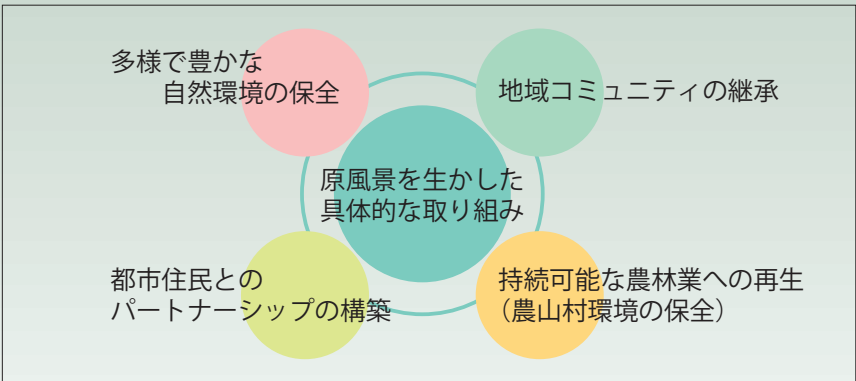


図3 原風景評価の視点

表1 モニターが選んだ五箇山らしい原風景の例

視点	生きた原風景	対象となる景観				原風景を守り、育てる取り組み
		春	夏	秋	冬	
多様で豊かな自然環境の保全	五箇山の自然環境は、その過酷さ故に四季の変化で様々な魅力を醸し出します。					・芸術の里山づくり ・世界遺産のもりづくり ・滑る、泊る、雪と親しむスノーランド
地域コミュニティの継承	地域のコミュニティが受け継ぐ暮らしの形は、人々の結束を強め、舞台装置となる景観とともに営みそのものが原風景につながります。					・五箇山の春祭り体験ツアーの実施 ・郷土愛の醸成 ・住民インストラクターの育成
持続可能な農林業への再生	きれいな水と寒暖の差など、五箇山の気候に合った農林産物が実る過程は、人々の英知を伺い知ることができます。					・報恩講をテーマとした食育の実施 ・立ち寄り農園の運営 ・五箇山田舎遊び体験ツアーの実施
都市住民とのパートナーシップの構築	住民の元気で明るい笑顔は、採光の原風景の一つです。それらは五箇山を外からの目で評価する人達によって磨かれます。					・「蓮如道」「道宗道」を辿るツアーの実施 ・合掌造り生活体験ツアーの実施 ・山野味覚の道体験ツアーの実施



図4 情報発信ツール・ニュースレター

範囲」で「楽しみながら」様々な取り組みを続けられることが重要と考えました。

そのためには、来訪を促し地域を知ってもらい、交流で地域を理解し、住むことを誇る取り組みが求められます。欧米人モニターが作成したニュースレターを中学校の英語の副読本に活用することも提案の一例です。

平成22年3月に事業を終えて以降、南砺市では五箇山の相倉と菅沼の両合掌集落の世界遺産のあり方を示す世界遺産マスタープランの策定に取り組む他、地域内の空き家調査を実施し、希望する都市住民の受け入れ環境の整備に向けた検討も進めています。

行政としては、地域づくりの取り組みが住民との協働で効果を発揮するよう、住民とのコミュニケーション機会を設け、ニーズに的確に応えた支援策を推進することが求められます。

住民側にも、行政の支援策を積極的に活かしつつ、取り組みの輪を広げ、できるだけ自立した活動へと発展させる工夫が必要となります。

大人の背中を見て育つ子どもたちに夢を与え、やる気と元気、勇気を与えられれば、原風景づくりがつながっていくでしょう。

おわりに
地域「らしい」原風景を、住民だけで守り育てようとするには限界があります。

行政や地域外の人々も巻き込み、地域の価値を見い出し、共有することで、それぞれの立場でできる範囲の関わりを持ち続けることが理想であり、関係者のネットワークそのものが地域の価値向上につながります。

地域づくりのお手伝いを生業とする私たちコンサルタントは、地域の宝を見つけ、磨き、育てる際の相談役として、当事者の知恵とやる気を引き出すことが求められます。

これからも、地域に根ざしたコンサルタントの矜持を持ち、お客様から「またお願い」されるよう、期待以上の成果を挙げる努力を重ねたいと思います。



図5 原風景を守り育てるために